

2026（令和8）年6月3日

「日本方言研究会 第122回研究発表会 報告」

発表者：高橋新（東京外国語大学大学院博士後期課程）

日本方言研究会第122回研究発表会にて行われた午後の部四つの発表、うち、とくに田形周造氏の発表について主に時間を割いて扱う形で報告した。上記発表会の概要と、扱った四つの発表タイトルは以下の通りである。

- ・研究発表会の日時：2026年5月22日（金）9:00～
- ・発表会の開催場所：立命館大学 朱雀キャンパス
- ・本報告で扱った発表：
 - ① 田形周造氏「カス型動詞派生の地域差と用法の多様性—井川・女川における臨地調査を中心に—」
 - ② 安井寿枝氏「上方古典落語に使用されている打消しの助動詞の特徴—マクラ部と本題部を比較する」
 - ③ 谷ロジョイ氏・柴田希隆氏・山岸祐己氏「静岡方言の過去表現「ケ」の使用・理解—性差・年代差・地域差から」
 - ④ 鴨井修平氏「意味拡張と言語接触から見る「トル」」

田形氏の発表（①）は、日本国内の諸方言における、動詞につく接尾辞「-カス」をもつカス型動詞を観察対象とし、（i）その派生パターン（※派生元動詞の有/無対・自/他の傾向）の地域差を見ること、（ii）従来指摘されてきたその「意図性」、および「意図性」以外の観点を検討することを目的とするものであった。発表ではそれぞれ次のように結論されていた。（i）東北地方は無対自動詞から、中部地方は無対他動詞から、九州地方は有対動詞からの派生が多い。東北・中部は中古・中央語とは異なる方言独自の発展をとげたのではないかと。 （ii）「-カス」の格増加という構造上の変化に伴って、「意図性」や「間接性」などの意味が生じている。なお報告者はこれらの主張に対し、当該形式の「意図性」という観点からの分析には限界があるのではないかという批判を提示するなどした。

②は、（i）上方古典落語資料内における打消しの助動詞について語用論的・統語論的な特徴を明らかにすること、（ii）落語におけるマクラ部と本題部の差異を明らかにすることを目的としたもので、それぞれ次のように結論されていた。（i）ン/ズ/ヘン/ヘ/エヘン/エヘ/イデ/ナイ/マイ/ナンド/ンカッタ/エヘンカッタ/ナカッタが確認され、マクラ部か本題部かで分布や接続の傾向が異なる。（ii）マクラ部：本題部に比べると新しい方言形が出やすい。自然談話に比べると古い方言形が出る。本題部：ズ/ヘ/ナンドなどが「形式化（必ず言う台詞は固定的な表現になる）」されており、古い形式が残る。共通語や文語的形式が、人物の特徴を表す表現として使用されている。

③は、静岡方言における過去を表す「ケ」という形式の各用法について、その使用・理解の実態を話者の性別・年代・出身地域ごとに見ることを目的とし、アンケート調査によって母方言話者1482名から有効回答を得るといふ、規模の大きい調査のもと分析・考察がなされたものであった。結論として、「ケ」の使用パターンを規定する最も主要な要因は出身地域であり、県内を西部・中部・東部に分けたとき、中部で最も使用・理解されていることが示された。

④は、西日本諸方言にある「ヨル」（進行）と「トル」（結果）による形式的なアスペクト対立において、「トル」が進行をも表すようになる「トルへの一本化」の動機について一説を提案するものである。伝統方言らしくない形式を使うことによって、フォーマル⇄カジュアルの発話スタイルを使い分けている可能性があることを示し、これが従来言われてきた意味拡張のような内的な要因によるものだけでなく、言語接触のような外的な要因もあって進行しているのではないかという主張がなされていた。